



■ 新年のご挨拶 (2026)



謹んで初春のご挨拶を申し上げます。

去年は、国家プロジェクトの大阪・関西万博が半年間開催され、国際性に富んだリアルなイベントなどが共感を生み成功裏に閉幕しました。翻って都草でも、11月にカンボジアからの訪問団との国際交流を行い、京都新聞にその様子が掲載されたことは記憶に新しいところです。これは、(一財)日本国際協力センター(JICE)が外務省から受託した事業の一環で、「日本のNPO法人の先進的・効果的な取り組みや、行政との連携事例について学ぶ」「日本におけるNPO法人等の成功事例についての理解を深め、参加者の自国での活動や業務の質を向上させる」との目的をふまえた市民社会交流でした(詳しくは裏面記事参照)。都草にとってこの経験は、国は違いましても同じ目的を遂行する立場として、強い信念と高い熱量を持った人達が集い活動することが重要であることを再確認する場ともなりました。都草は、来年創立20周年を迎えます。この景色を観ることができるのは、その違いを認め合い全員が尊重され活躍できる環境を作り出す包摂性のある会であること、そして社会の健全な発展のために必要不可欠な要素である利他性を持ってボランティア活動を行う会であることを会員全員が共有するからです。大谷翔平氏のMVPトロフィーに刻印された言葉「team effort」がふと脳裏に浮かびました。

新年を迎えるにあたり皆様のご多幸をお祈り申し上げますと共に、本年もご指導ご協力を賜りますようお願い申し上げます。(理事長 小松 香織)

■ 救命講習会



12月11日(木)に京都アスニーにて救命講習会が実施されました。上京消防署のご協力の下、現場に居合わせた人が行う応急手当(心肺蘇生法とAED)に関する講話の後、実践訓練を行いました。

講話によると、京都市消防局の1年の救急出動件数は約10万件。救急車が現場に到着するまでの時間は平均で約8分。目の前で人が倒れ、呼吸や心臓が止まっていた場合、救急車到着までの間、何もしない場合と心肺蘇生や電気ショックを行った場合では1か月後の社会復帰率に大きな違い(例 心肺蘇生 3.3%⇒8.8% 電気ショック 16.6%⇒42.6%)があり、周囲の人と協力して勇気をもって行動に移すことの重要性を再認識しました。2班に分かれた実践訓練では、各自が訓練用人形で心肺蘇生を行いました。特に重要なポイントは、大きな声で助けを呼んで人を集めること。「あなたは119番へ電話」「あなたはAEDの手配」と依頼することで「誰か」ではなくそれぞれの動きが明確になります。胸骨圧迫(1分間に100~120回のスピードで30回)と人工呼吸(2回)の繰り返し(人工呼吸ができない場合は胸骨圧迫を継続)はかなりハードで、多くの人がいれば胸骨圧迫を交代しながら継続的に実施できることを実感しました。

AEDの操作においては、電気ショックのボタンを押す際「離れて!」と大きな声で言い傷病者に触れないことが最も大切であることや、AED設置場所を把握するため「京都市AEDマップ」を活用する手段があることも知りました。ガイド活動時のみならず、誰もが救急事故現場に遭遇する可能性があります。知識とスキルを身につける研修会に次回はぜひご参加ください。(会員 杉 恵美子)

■ 歴史探訪会（西部会）の一員になりました



昨年の 4 月、都草に加入と同時に、以前からのご縁もあって歴史探訪会（西部会）の一員になりました。歴史探訪会は西部会の他に東部、南部、伏見深草部もありますが、西部会だから西、東部会だから東の区域のみを訪ねる訳ではなく、できるだけ過去と重複しない場所を選んでいきます。

歴史探訪会の準備には、訪問場所の選定、下見、資料の作成などがありますが、ベテランの会員の方々と一緒に準備に携わることにより大変勉強になることが多いです。

また、都草の「研究発表会」にも何度か参加させていただきました。会員の方の発表される内容はどれも素晴らしく研究に対する熱い想いも感じられ、

とても印象に残りました。京都検定のような幅広い分野で京都の学習をするのも楽しいですが、興味ある分野の研究を掘り下げる発表も面白く、「好きなことに熱中する」「好きなことを継続する」ということが大切だと思いました。

都草では京都検定受験の対策もできる上に、研究発表や美化活動の場もあり、またガイドに挑戦するなど様々な活動の場が設けられており、至れり尽くせりの感があります。年を重ねるごとに新しいことにチャレンジし脳に刺激を与えることは大切だと痛感しており、都草ではそれをかなえることができます。様々な個性的な会員の方々と交流できるのも魅力で、今後も都草での多彩な活動を楽しみにしております。（会員 北村 真理子）



■ カンボジアからの訪問団と国際交流



11 月 29 日（土）、カンボジアから来日した市民社会団体と行政関係者 8 名が、「日本の NPO 法人の先進的・効果的な取り組みや、行政との連携事例について学びたい」として都草を訪れました。

今回の訪問は、一般財団法人 日本国際協力センター（JICE）が、外務省から受託した「対日理解促進交流プログラム（通称：JENESYS）」事業の一環で、「日本・カンボジア市民社会交流」という招聘プログラムをふまえたものです。

冒頭、小松香織理事長が手を合わせてクメール語で挨拶すると、緊張気味だった参加者の顔が瞬時にして笑顔になり、一気にその場が和やかな空気に包まれました。その後、社会連携事業、会員事業、主催事業、受託事業の 4 つの柱で活動していることを説明しました。特に社会連携事業について詳しく話をし、その都度、通訳の方がテンポよくクメール語に翻訳しました。参加者は頷きながら聞いていましたので、私たちの活動をよく理解していただけたのではないかと思います。

説明後の質疑では都草が用意した日本茶と和菓子をいただきながら、くつろいだ雰囲気でも話が弾みました。

説明会の後は、小松理事長が府庁旧本館の旧知事室、正庁、中庭、旧議場を案内しました。

終了後に行った参加者へのアンケートでも、「日本人が現代の技術システムを活用しながらも、なお自らの伝統と文化を維持していることに感銘を受けました」「都草が京都を心を込めて大切にしている姿に本当に感銘を受けました」など、都草の活動をよく理解していただけたことがわかりました。（会員 須田 信夫）

